

「分析アジア哲学交流プログラム報告書」

京都大学文学研究科修士2年 青木 眞澄

ここでは、2016年3月4日から3月14日にかけて行われた台湾派遣について、簡潔に報告する。

本プログラムは、①国立台湾大学でのセミナー(カントの自由論)への参加 ②国立陽明大学でのセミナー(クリプキのヴァイトゲンシュタイン論)への参加および派遣学生(五十嵐・青木)による個人研究発表 ③東呉大学での派遣学生(同上)による個人研究発表 ④国立政治大学での国際学会(International Workshop “Buddhist Philosophy of Consciousness”)への参加を行うものであった。以下では、上記①から④について、プログラム内容、学習成果、海外での経験、進路への影響という観点から報告する。

・プログラム内容

①本プログラムにおいて予めより交流のある現地の学生の方の便宜により、国立台湾大学の開講するWenzel教授の授業の第二講を聴講させていただいた。②同じく本プログラムにおいて交流のある国立陽明大学のKai教授の便宜により、教授のセミナーに参加させていただくとともに、その場において派遣学生による個人研究発表の機会を与えていただいた。③東呉大学では、出口教授の講演と派遣学生の研究発表の場を用意していただいた。(出口教授の講演は事情によりキャンセル) ④前年に引き続き、例年開催される、「意識の仏教哲学」についての世界的な国際学会に参加した。また、それぞれの大学において我々と同様の分野を専修する大学院生との交流を深め、本プログラムの永続的な発展に寄与することができた。

・学習成果

①日本の大学における伝統的な原典講読とはスタイルの異なる授業であり、同じ原典に対しても多様なアプローチによる研究スタイルが存在することを実感することができた。②③日本の伝統的なものとは異なる研究スタイルの可能性を実感することができたと同時に、派遣学生にとって貴重な個人研究発表な場をいただき、30分～1時間のプレゼンテーションをさせていただいた。通常、英語で研究発表を行う機会は非常に限られているため、発表では言語の壁に苦心しながらも、回数を重ねるごとに、内容面、方法面双方において成長することができたと実感している。また、現地の先生方、学生の方々から非常に多面的でクリティカルな質問、コメントを多くいただき、今後の研究にとって大きな前進となった。④政治大での国際学会は、自分の専門とはやや外れておりまたサンスクリット語を知らないために、内容を理解することに苦心したが、そこで交わされる議論の国際的、学際的なさまからは多くのことを学んだ。また、世界各地から集まる著名な研究者の方々の警咳に接することができたことは大きな収穫であった。

・海外での経験

まず、上記のプログラムは全て英語で行われたため、英語の読む、聞く、書く等の諸能力が上達した。また、上記プログラム以外にも、現地の先生方、学生の方々との交流等を通じて、語学の諸能力が上達した。①②④レクチャー、学会等でのインプット系のプログラムでは、現地の学生の方々が積極的に発言されている様から刺激を受けた。こちらには言語の壁があるとはいえ、より積極的な参加姿勢が必要であると感じた。②③派遣学生が研究発表を行うアウトプット系のプログラムでは、最初はメモを手放せずフロア側に目を向ける余裕がなかったが、回を重ねるごとにこうした問題を解消させ、フロア側の反応に意識を向けることができるようになった点が大きな収穫であった。とはいえ質疑応答において質問に的確に答えることに大変苦心したので、今後の課題としたい。

・進路への影響

報告者は現在修士課程2回生であり、来年修士論文を提出し博士課程への進学を希望する予定である。博士課程に進学した暁には、海外への長期留学を視野に入れており、本プログラムでの経験はこうした留学計画に役立つと考えている。伝統的には日本で研究者を目指す学生はヨーロッパやアメリカへ長期留学することが多かったが、今後は留学候補の視野を例えばアジアなどに広げるべきであると考えようになった。

最後に、台湾で我々を受け入れてくれた4大学では、非常に手厚く歓迎いただいたことに、この場を借りて感謝申し上げたい。各大学では我々にディナーを振る舞っていただいた。また、交流のある学生の方々には台湾を案内していただいた。さらに、東呉大学には宿泊施設をご用意いただいた。今後、海外の学生の方々を我々が受け入れる折には、是非同じような歓迎をさせていただきたい、と心から感じている。